

「大祭司の祈り（1）」

ヨハ 17 : 1~5

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ヨハ 14 章 最後の晩餐の部屋の中で語られた。
- ②ヨハ 15~16 章 ゲツセマネの園に向かう途中で語られた。
- ③ヨハ 17 章 恐らく、ゲツセマネの園の近辺での祈りであろう。
- ④イエスの弟子たちへの教えは、勝利のことばでおわった。
 - * 「わたしはすでに世に勝った」(ヨハ 16 : 33)
 - * 十字架の死が想定されている。
 - * さらに、父なる神に戻って行くことが想定されている。
- ⑤この段階で、イエスの働きは預言者から祭司に移行した。
- ⑥ここに記された祈り（大祭司の祈り）は、聖書の中の最高の祈りである。
 - * イエスの心の中を覗くことができる祈りである。
 - * 私たちが実践すべき適用を含んだ祈りである。
 - * 弟子たちに創作できるような内容の祈りではない。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 151 キリストの執りなしの祈り

2. アウトライン

- (1) 自分自身のための祈り (1~5 節)
 - (2) 使徒たちのための祈り (6~19 節)
 - (3) すべての信者のための祈り (20~26 節)
- (今回は、(1) を取り上げる)

3. 結論 :

- (1) 自分のための祈り
- (2) 父なる神への祈り
- (3) 神の栄光を求める祈り

大祭司の祈りから、靈的教訓を学ぶ

I. 自分自身のための祈り (1~5 節)

1. 1 節

Joh 17:1 イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」

(1) 「これらのことを話してから」

- ①ヨハ14~16章の弟子たちへのメッセージを終えてから。
- ②場所は、ゲツセマネの園の近くであろう。

(2) 「目を天に向けて」

- ①私たちの場合は、頭を垂れ、目を閉じて祈ることが多い。
- ②しかし、旧約聖書には、そのような祈りの姿勢は出てこない。
- ③祈りの形式に固執する必要はない。内容が問題である。
- ④立ったままでも、歩きながらでも、祈ることができる。

(3) 「父よ」

- ①イエスの場合は、父と子の関係において祈っている。
- ②イエスは、合計6回、父に呼びかけている。
 - * 「父よ」 1節、5節、21節、24節
 - * 「聖なる父よ」 11節
 - * 「正しい父よ」 26節
- ③「恵みの時代」の信者は、イエスを通して父に祈る。

(4) 「時が来ました」

- ①イエスは、父なる神の御心に忠実に歩んで来られた。
- ②受肉の目的は、人類の罪を贖う計画の成就である。
- ③「時」とは、十字架の時である。
- ④それまでは、イエスの時はまだ来ていなかった。
 - * イエスの敵は、イエスを逮捕することができなかった。
 - * ヨハ2:4、7:6、7:8、7:30、8:20
- ⑤今、イエスの時が来た。
 - * ヨハ12:23、13:1、17:1

(5) 「子の栄光を現してください」

- ①イエスの心の中を見ることができる。
- ②「子の栄光を現す」とは、どういうことか。
 - * 苦難の中で父がイエスを支えること
 - * 父がイエスの犠牲の死を受け入れること

*父がイエスを復活させること

・復活は、イエスが神の子であることの証拠となる。

*イエスが本来持っていた栄光を回復させること

・昇天によって、イエスは栄光の座に着く。

(6)「あなたの子があなたの栄光を現すために、」

①原文の語順と日本語の語順は逆である。

②イエスは、自分の願いの目的を明らかにしている。

*神に何かを願う時に、私たちもその目的を申し上げるとよい。

③父なる神の知恵、力、愛が、イエスを通して現れるように。

④イエスを信じる者たちに永遠のいのちを与えることで、父の栄光を現す。

⑤罪人が新生し、神をたたえるようになることは、父に栄光をもたらす。

2. 2～3節

Joh 17:2 それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。

Joh 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

(1) イエスの願いは、父なる神の御心に沿ったものである。

①父は子に、すべての人を支配する権威を与えた。

*詩2篇のテーマ(メシア的詩篇)

②父は子に、裁きを行う権威を与えた(ヨハ5:27)。

③子は、自分から命を捨てる(ヨハ10:18)。

④子は、父からいただいたすべての者に、永遠のいのちを与える。

⑤信者は、「父からいただいた者」である(5回この表現が出て来る)。

*2節、6節(2回)、9節、24節

⑥救いの教理の二面性

*天地が造られる前から、父はキリストに属する者を選んでおられる。

*神は、すべての人を招いておられる(信仰によって救われない人はいない)。

(2) イエスによる永遠のいのちの定義

①パリサイ人たちは、神の国に入ることが「永遠のいのち」だと考えていた。

②一般的には、いつまでも続くいのちである。

*しかし、永遠のいのちとは、永遠に存在し続けることではない。

*すべての者は、永遠に存在し続ける。

*どこで、どのような状態で存在し続けるかが問題である。

③永遠のいのちとは、それは、唯一のまことの神を知ること。

*「唯一のまことの神」とは、偶像と対比した言葉である。

④それは、父が遣わされたイエス・キリストを通して可能となる。

*父と子とは、同質の神である。

⑤それは、イエス・キリストを通して与えられる「神との平和」である。

⑥「知る」とは、親密な個人的関係を指す動詞である。

⑦その関係は、永遠に続く。

3. 4~5節

Joh 17:4 あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上でああなたの栄光を現しました。

Joh 17:5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。

(1) イエスの自分自身のための祈りは、使命の完了を土台としたものである。

①イエスは、父がイエスに与えた使命を成し遂げた。

②十字架の死が確実なこととして語られている。

(2) イエスの願いは、受肉前の栄光の回復である。

①世界が存在する前から、子は父といっしょに栄光を持っていた。

②受肉は、「メシアの辱め」の始まりである。

③十字架は、「メシアの辱め」の終わりである。

結論：

1. 自分のための祈り

(例話) クリスチャンの祈りに感動した人の話

(1) 自分のために祈ることは、利己的なことではない。

(2) 利己的な祈りとは、自分だけの繁栄を求める祈りである。

(3) 他人のために祈る前に、自分の心と行いが神と調和している必要がある。

(4) 自分のための祈りは、楽器の調律と同じである。

*自分の魂の調律が終わった人は、効果的な祈りを捧げることができる。

(5) 自分のための祈りは、クリスチャンにとって必要不可欠なものである。

2. 父なる神への祈り

- (1) イエスは、弟子たちに、父に対して祈るように教えてこられた。
- (2) そのモデルが、「主の祈り」である。
- (3) しかし、「主の祈り」は、「主イエスが教えた弟子たちの祈り」である。
- (4) ここでは、イエス自身も父に対して祈っている。これこそ「主の祈り」である。
- (5) ヨハ20:17

Joh 20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」

- ① マグダラのマリアへのことば
- ② 「わたしの父」、「わたしの神」
- ③ 「あなたがたの父」、「あなたがたの神」
- (6) イエスの祈りは、三位一体の神の「父と子」の関係を基にしたものである。
- (7) 私たちの祈りは、被造物が創造主に対して祈るものである。
 - ① 私たちは、父なる神に対して、イエス・キリストを通して、聖霊に導かれて祈るのである。

3. 神の栄光を求める祈り

- (1) ヨハ17:5

Joh 17:5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。

- (2) イエスが栄光を求めた理由は、父の栄光が現れるためである。
- (3) イエスは、受肉期間にご自身の栄光を隠された。
- (4) 山頂での変貌が、唯一の例外である。
- (5) イエスは、父に従順に歩むことによって父の栄光を現された。
 - ① 栄光とは、人格にかかわる概念である。
 - ② 神の義、力、愛が証明されることは、神の栄光につながる。
- (6) 人間の生きる目的は、神の栄光を現すことである。
 - ① ロマ11:36

Rom 11:36 というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

- ② 1コリ10:31

1Co 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。

- ③ エペ1:11~12

Eph 1:11 この方にあつて私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画

のままをみな行方の方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。
Eph 1:12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。

④エペ1:13～14

Eph 1:13 この方にあつてあなたがたもまた、真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。

Eph 1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

(7) 聖書が書かれた目的は、神の栄光のためである。